

# 元首政初期、レプキス・マグナの「ローマ化」

——境界の地トリポリタニア——

青木真兵

はじめに

現在のリビア西部は北アフリカの丁度中央に位置する(図1)。この地域は古代地中海世界において、レプキス・マグナ、サブラタ、オエアという「三つの都市 *τριπολις*」が由来となり、トリポリタニアと呼ばれた。もともとレプキスは前7世紀半ばから後半に、サブラタは前6世紀末期、オエアは前5世紀にフェニキア人によって交易港として造られたとされる<sup>(1)</sup>。この地域は前3世紀末まではカルタゴの支配、その後ヌミディア王国の勢力下を経て、紀元前1世紀末にローマの属州に吸収された地域であった。アウグストゥス治世に入ると、レプキスはローマの直接の軍事的支配がなかったにも関わらず、市場や劇場などの公共建築物が造られ、そこにはラテン語の碑文が飾られた。その後レプキスは後109年に植民市の地位を与えられ、後193年にはこの都市出身のローマ皇帝が生れる。セプティミウス・セウェルスがその人であった。後203年、彼によってイタリアの町と同様に税金が免除されたレプキスはローマ帝国における重要な都市へと発展していった。こうしてレプキスは、属州アフリカの首都カルタゴに次ぐ第二の都市として繁栄を迎え、「ローマのような」大理石に彩られた壮麗な都市へと変わっていくことになる。

1980年代以降ローマ化という概念は帝国・植民主義的な文脈を含むとして批判され、昨今ではより客観的な意味を込めて文化変容と呼称されることが多い<sup>(2)</sup>。ただレプキスは遺跡自体や碑文などの残存状況が比較的良く、アウグストゥス治世以降「ローマ」を象徴するモニュメントが都市内に造られていったことがわかっており、後193年にローマ皇帝となるセプティミウス・セウェルス帝を生んだ都市であった。以上のような歴史を持つ都市レプキスは、一般的に「ローマ化」<sup>(3)</sup>した都市であると言われる<sup>(4)</sup>。

このようにローマ帝国史において重要な役割を担うレプキスが、ローマによる直接の支配がなかったにも関わらず、急速な都市発展を遂げたのはなぜだろうか。本論ではその理由について考察する。

レプキスの都市発展を考察する際、従来の研究において問題となるのは、トリポリタニアが主に西地中海地域の中で考察されているという点にある。属州アフリカの「ローマ化」は一般的に、イベリア半島やガリア諸地方等の西地中海地域とはほぼ同型と説明されてきた<sup>(5)</sup>。しかし、属州アフリカと言っても広大である。例えば、共和政末期に生きたサルスティウスは、レプキスがアフリカの東端でありギリシア都市キュレネと隣接していることに言及している<sup>(6)</sup>。このような地理的状況は、ローマの直接の支配がなかったにも関わらずいち早く都市発展を遂げ、その後ロ

ローマ皇帝を生み出すに至るレプキスという都市が形成されていく上で何か影響を与えなかったのだろうか。このような観点から、トリポリタニアという地域の持つ地理的、文化的特性に注目し、レプキスの「ローマ化」議論における問題解決の糸口を探る。

## 第一章「西地中海地域としてのトリポリタニア」

トリポリタニアは、ローマ帝国の政治的区分において属州アフリカ・プロコンスラリス州に含まれる地域である。そのためローマ帝国に組み込まれていったという点において、結果的に属州アフリカと同様に「ローマ化」した地域であると考えられている。しかし属州アフリカの展開過程を見ると、トリポリタニアにおける都市発展の過程が異なっていることがわかる。トリポリタニア第一の都市と考えられているレプキスは、ローマによる直接の支配地から遠く離れていたために自治を保っていたことがその特徴として述べられるのである<sup>(7)</sup>。以下、レプキスに対象を絞ってローマの属州に入るまでのこの地域の歴史を述べ、現在通説となっているマッティンリーの見解をまとめる。

レプキスはもともとカルタゴの支配下にあり毎日1タレントの税を収めていた<sup>(8)</sup>。そして前202年、第二次ポエニ戦争によってカルタゴの政治的影響力が衰退すると、レプキスはヌミディア王国の勢力下に入る<sup>(9)</sup>。そのヌミディア王国の勢力下において二つの戦争を経験することになる。一つは前111年にヌミディアとローマ間で行われたユグルタ戦争。もう一つは、前49年に始まるカエサルとポンペイウスによるローマの内乱がアフリカを舞台に行われた際であった。この二つの戦争下におけるレプキスの立ち位置は以下のようなものであった。ユグルタ戦争下のレプキスは、ヌミディアの勢力下でありながらローマと同盟を結び、ローマに兵の派遣を要請している。他方、ローマの内乱の際にはヌミディア側すなわちポンペイウス側に付いたために、戦後カエサルから罰としてオリーブ油を徴収されている。

このようなレプキスの歴史をマッティンリーはこう解釈する。まずカルタゴによって重税を課せられていたという事実、その税を支払うことができたレプキスの経済的可能性を見出す。そして前202年、第二次ポエニ戦争においてカルタゴの政治的影響力が衰退すると、レプキスはその抑圧から解放され、発展を遂げた<sup>(10)</sup>。とはいえ、レプキスは完全に他者の支配から独立したわけではなく、ヌミディア王国の勢力下にあった。ただ以前のような重税を課せられるというのではなく、「十分な自治」を営むことが可能な状態にあった<sup>(11)</sup>。マッティンリーはレプキスに「十分な自治」があった根拠として、ユグルタ戦争とローマの内乱期にレプキス都市内が二分したという状況をあげる<sup>(12)</sup>。さらに内乱の際には、レプキスはポンペイウス側についたことで敗者となり、カエサルによって増税を課されている<sup>(13)</sup>。この出来事からもマッティンリーは、レプキスの保有していた自治の背景に豊富な経済力があったことを見出している<sup>(14)</sup>。その後レプキスは、アウグストゥス治世下に入り急速な都市発展を遂げる。本論の考察対象でもある市場と劇場は、この時期に造られており、そこにはローマを歓迎するかのようなモニュメントが見られる。

以上のように、レプキスは「十分な自治」を営み、ローマの属州支配の中心地から遠かったにも関わらず「ローマ」をいち早く取り入れていった都市として語られる。中でもマッティンリーは、レプキスが都市発展を遂げていった背景として経済的特性に注目をし、レプキスがオリーブ油の一大生産地であったことをその要因としてあげるのである<sup>(15)</sup>。レプキスにとって、ローマの地中海支配はオリーブ油の市場拡大を意味していた。そのためにレプキスは、ローマをいち早く受け容れ、ローマを歓迎するモニュメントを造った。つまりレプキスの都市発展とは、ローマの支配によってなされたものではなく都市の「十分な自治」と経済的背景を基盤として主体的に行われた、と考えられているのである。

一方元首政初期の属州アフリカは、ローマにとって小麦などの穀類がとれるいわゆる「食料庫」という認識であった。カエサルやアウグストゥス治世においてイタリアから退役兵の入植が行われた後、イタリアからの移民は比較的少ないが、土着社会のエリート層はローマ帝国の都市システムに統合されていったと考えられている<sup>(16)</sup>。栗田伸子は、属州アフリカは他の西地中海地域と同様にローマ帝国へ組み込まれていったという理解を踏まえた上で、最近の「ローマ化」研究の脱政治化・脱軍事化を批判する。栗田によると、属州アフリカにおける「ローマ化」研究の脱政治化・脱軍事化は、「ローマ化」の第一原因がローマの支配であることを見えにくくしているという<sup>(17)</sup>。栗田も批判するように、都市の主体性のみを重視した「ローマ化」にはローマの存在の軽視が指摘できる。以下ではこの点に注意しつつ、レプキスが「十分な自治」を営んでいた理由としてマッティンリーのあげた二つの戦争におけるレプキスの立ち位置を確認する。まずはヌミディア戦争時である。

「ターラの逮捕と期を同じくして、レプキスからの使節がメテッルスへと送られた。それは軍団と司令官を送ってほしい、との懇願であった。ハミルカルというある身分の高い男が不義を働き革命を図って、統治者の命令によっても法律によっても抑えることができない、と彼らは陳述したのである<sup>(18)</sup>。」

前112年から前106年にかけて行われたローマとヌミディア王国の戦争において、レプキスは前111年にローマと同盟を結んでいる。この記述にあるように、軍を派遣して欲しいという使節がレプキスからローマに送られたのは前109年のことであった。このエピソードから、レプキスの都市内部がローマ側につくかヌミディア側につくかで一致していなかったことがわかる。次はローマの内乱期に関する記述である。

「レプキスの住民に対してはどうかという、彼らの財産はユバによって略奪されてしまっていたのでそれを取り戻させ、告訴を申し立てる彼らの代理人を受け入れるべく、元老院は仲裁人を指名した。一方カエサルは、彼らに対して年間300万ポンドのオリーブ油を支払うことを命じた。なぜなら戦争の開始時に彼らのリーダー間に不和が生じ、結局彼らはユバと同盟を結び、兵、軍、お金を支援したからであった<sup>(19)</sup>。」

前54年にカエサルの勝利で終結したローマの内乱の際に、レプキス内部がまたも二分していることをこの史料は示している。これらの史料はレプキスが「十分な自治」を保っていただけでなく、ヌミディア王国とローマという「強者の狭間」という状況下にあったことがわかる。マ

ッティンリーは、都市内が二分していたことを「自治」と解釈し経済的特性に基づく「ローマ化」への道筋としているが、この史料からは「強者を選ばざるを得なかった」状況が伝わってくる。レプキスが保持していた「十分な自治」は、ローマとヌミディア王国という強者の政治的影響下のもとにあったことを認識しておくべきだろう。

さて、レプキスについての研究は、歴史資料よりも考古学資料の方が多く残存するために、いわゆる文化的側面への研究が中心となっている。フォンタナは墓とその埋葬品を「公と私」という視点から分析した。その結果フォンタナは、「公」のものつまり公共建築やエリート層の大きな墓には、早くからラテン語が使用され洗練されたものとなっていったが、「私」的なものつまり身分が低い者の墓や衆人の目につかないところには、新カルタゴ語が残っていたと述べる。前述のとおりレプキスでは、公共建築などの「公」の場でみられる碑文からは、後109年にレプキスが「植民市」になったのを最後に、新カルタゴ語が見られなくなる。しかし、共同墓地から出土する土器に書かれた文字の分析やセウェルス帝の妹がラテン語をほとんど話せなかったという記述<sup>(20)</sup>から、都市に住む人びとの間からカルタゴ語は消えていなかったとフォンタナは結論づける<sup>(21)</sup>。

さらに、レプキスの政治体制はカルタゴの体制を踏襲しており、執政官であるスフェス *sufes* が二人、その下に百人会といったローマで言う元老院があったと考えられている。そしてこの体制はローマ帝国の支配下に入っても維持されていたが、レプキスが「植民市」になったのを最後に終わる。最後のスフェスは、後にローマ皇帝となるセプティミウス・セウェルスの祖父であった<sup>(22)</sup>。

以上をまとめると以下ようになる。レプキスは属州支配の中心地から遠かったためにカルタゴ時代からの体制や文化が維持されていたが、専らオリヴ油交易の市場拡大を理由に「ローマ」を獲得した。そのためにローマ帝国下において「ローマ都市」という外套をまとっていても、土着文化が残存しているのである。しかし私は、こうした理解が非常に一面的なものであると考える。まずレプキスの都市発展の重要な要素である都市の自治を考える際に、政治・軍事的ローマの存在よりも専ら経済的背景を理由とした都市の主体性のみを求めているという点。そしてもう一点は、逆説的なようだが、政治的影響を誇ったローマの存在を文化的側面の研究においても自明の前提とし過ぎている点にある。つまりレプキスの「ローマ化」は、都市発展と文化変容とを分けて考えねばならないのである。

従来の文化的側面への研究は、レプキスが属州アフリカという政治的枠組みで論じられてしまうために、どうしてもローマとの関係が中心に語られてきた。このように政治的枠組みを自明の前提とすると、いわゆる文化変容への研究も「ローマ」との関係に多くが費やされてしまう。パーキンスは、レプキスのアウグストゥス治世に年代付けられる柱頭がヘレニズム期のシチリア型であると述べる。そして同型のものが、アフリカに対するローマ支配の中心地であるウティカではより早い共和政末期に年代付けられているとする。つまりシチリア島に近いローマ支配の中心地では、レプキスよりも早くその文化が伝来しているのである。しかしパーキンスの主張は、この遅い早いというところにあるわけではなく、アフリカの地が共和政期において、ギリシア人の



図1 古代地中海世界におけるレプキスの位置（大城道則『古代エジプト文化の形成と拡散』ミネルヴァ書房，2003年，x頁より作成）

植民都市があった南イタリアやシチリア島からヘレニズム文化の洗礼を受けていたというところにある。つまりアフリカは帝国下に入る前に、ギリシア・ローマ文化を受け容れる素地ができていた、というのである<sup>(23)</sup>。ローマ帝国下に入り早々に都市発展を遂げることができた背景として「文化的土壌」があった、というパーキンスの主張には私も同意する。しかし彼は属州アフリカという政治的な枠組みにおいて文化変容を論じているために、ウティカやカルタゴなどの属州の中心地と、その中心地から遠く離れているレプキスの文化変容を一括りにしてしまう。ただこの「文化的土壌」という考え方は、レプキスがローマ支配の中心地から遠く離れていることと、レプキスがいち早く都市発展を遂げたという一見矛盾する事柄を架橋する。

実際図1を見るとわかるように、レプキスは西地中海地域の周縁に位置している。パーキンスは、ローマを中心とした西地中海地域に限定した考察に終始したが、レプキスは西地中海地域の周縁、すなわち東地中海地域の周縁でもある。そこで次章では、属州アフリカの都市レプキスという政治的枠組みからの視点では捨象されてしまってきた第三の要素、東地中海地域に目を向けることで、この都市の「文化的土壌」に注目をする。

## 第二章「トリポリタニアに見る東地中海的要素」

図2はアウグストゥス治世下の都市レプキスである。ただ、レプキスのフォルムを取り囲む最初のグリッド型の地域はアウグストゥス治世以前に存在したと考えられている<sup>(24)</sup>。アウグストゥス治世に入り、そのフォルムに隣接する形で、従来あったフェニキアの二つの主神シャドラバとミルカシュタルトの神殿が、リベル・パーテルやヘルクレスを祀る神殿として造り変えられた。さらに大きな二つの「ローマ」的建築物が建設された。それが第二章で分析対象とする市場と、第三章で分析対象とする劇場である。

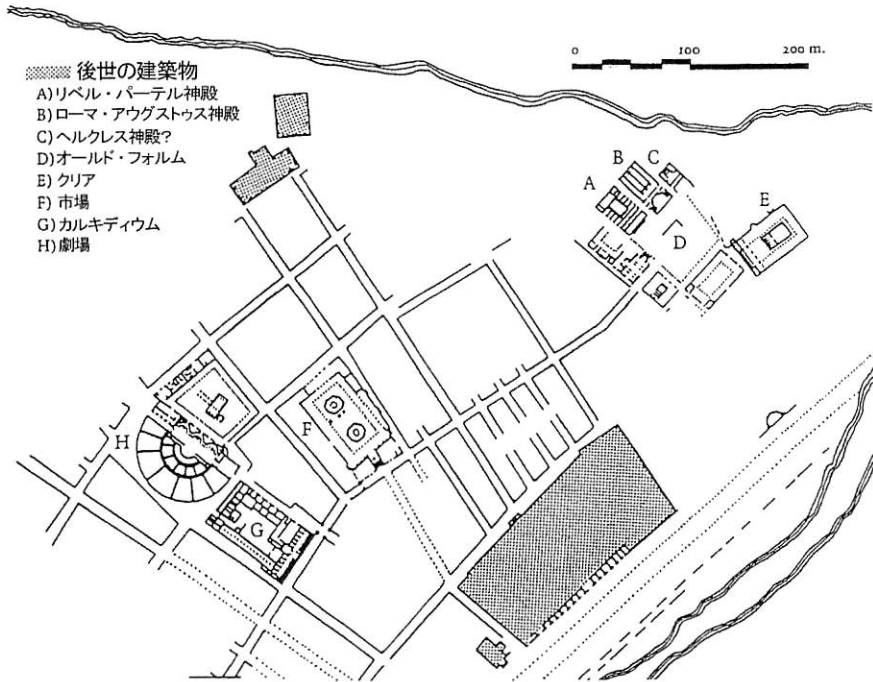


図2 アウグストゥス期のレプキス (R. Macmullen, *Romanization in The Time of Augustus*, New Haven and London, 2000, p. 41. より作成)

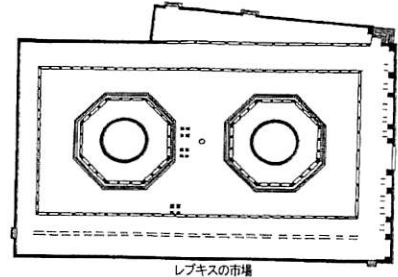
ツァンカーは、「ローマ」を視覚的に捉えることができる建築物が都市内に建てられていくことを「ローマ化」と呼んでいる。彼は都市プランがグリッド型になることをはじめ、神殿やクリア、公共浴場や劇場が建設されることをあげる。彼によると、公共浴場や劇場などの巨大な建造物は、都市に住む人びとや、その都市を通りかかる人びとに対して「ローマ」を認識させ、「ローマの支配」を人びとのなかに内在化していったという。それらの「ローマ」を象徴する巨大な建築物は「都市の顔つきを変える」もので、人びとに強く「ローマ」を意識させた、と彼は述べる<sup>(25)</sup>。しかしハドリルはツァンカーを以下のような点において批判する。それはツァンカーがナチスのアナロジーでローマ帝国を語っているために、建築物を「支配」と結びつけて考えすぎているというのである<sup>(26)</sup>。私もハドリル同様、劇場などの巨大な建築物が都市に住む人びとにローマの「支配」を内在化させた、というツァンカーの見解に対しては留保せざるを得ない。しかし巨大な建築物が非常に目立つものであり「都市の顔つきを変える」ものである、という見方には同意する。そしてこのような観点から前8年の市場と後1/2年の劇場に注目する。

この二つの建造物はレプキスのスフェスであり、皇帝崇拜を司っていたアンノバル・タパピウス・ルフスによって建設された。彼はいわゆる「土着社会のエリート」であり、オリーブ油の交易を営み、ローマの支配によって市場が広がったことで財を成した豪商であると考えられている<sup>(27)</sup>。そして自らの名前もローマ風に変え、従来のフェニキア風の呼び名であったならば「ハンニバル」という名前であった。この人物によって市場と劇場という二つの建造物は建てられ、そこに皇帝崇拜の碑文がラテン語と新カルタゴ語で記されたのだった。

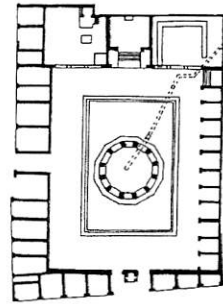
ローマ帝国でよく見られる市場は、長方形のオープン・スペースの四方を柱で取り囲んでいる。図3によればポンペイの場合は八角形のトロス（円形建築物）が一つだが、レプキスの場合にはトロスが二つ立っていることがわかる<sup>(28)</sup>。従来この市場は、レプキスの「ローマ化」の嚆矢であると説明されてきた。なぜなら市場においてラテン語と新カルタゴ語で書かれたバイリンガル碑文が、最初に出現するためである。さらに写真1を見ると、碑文を支える両脇の石柱には左にフェニキアの船、右にローマの船が描かれている。これらを造ったのがレプキスの人であるために、レプキスは一方的にローマ帝国に支配されたわけではなく、むしろ交易のために「ローマ」を受容し獲得していったことが窺える。しかし形態からみると、このような形の市場の発祥はローマのあるラティウム地方ではなく、ポンペイのある半島南部のカンパニア地方がマグナ・グラエキアだったといわれている<sup>(29)</sup>。このような事実は、「ローマ化」概念の曖昧さを示す批判の一つとなっている。

さらにこの市場には、ローマとフェニキア以外の文化的要素が存在している。それは服をつくるために石に記された、尺の単位に見ることができる。写真2にはその単位が刻まれていて、上からローマ、フェニキア、そしてエジプトの尺の長さとなっている。ローマ、フェニキアに並んでエジプト尺の存在は、レプキスにおけるエジプト人の存在、または往来を示唆している。つまり東地中海地域とのつながりである。

トリポリタニアの各都市には、エジプトの痕跡を裏付けるものが存在している。レプキスから西方200 kmに位置する都市サブラタのマウソレアというモニュメント的要素を持った墓を分析したデイ・ヴィータは、



レプキスの市場



ポンペイの市場

図3 レプキスとポンペイの市場 (R. Macmullen, *Romanization in The Time of Augustus*, New Haven and London, 2000, p. 37. より作成)

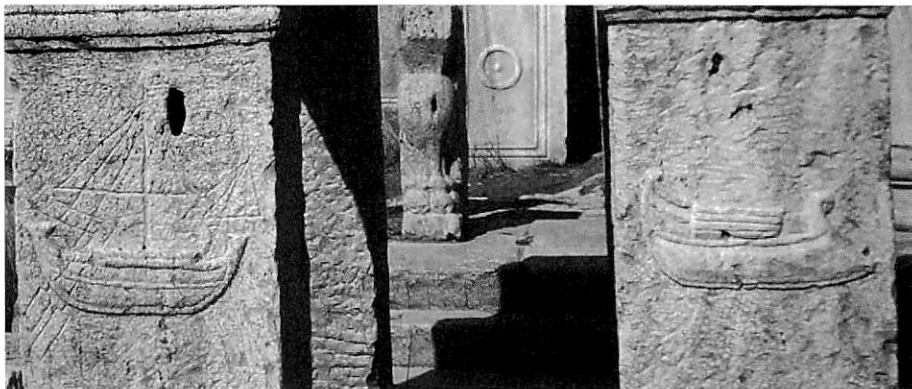


写真1 フェニキアの船とローマの船 (著者撮影)

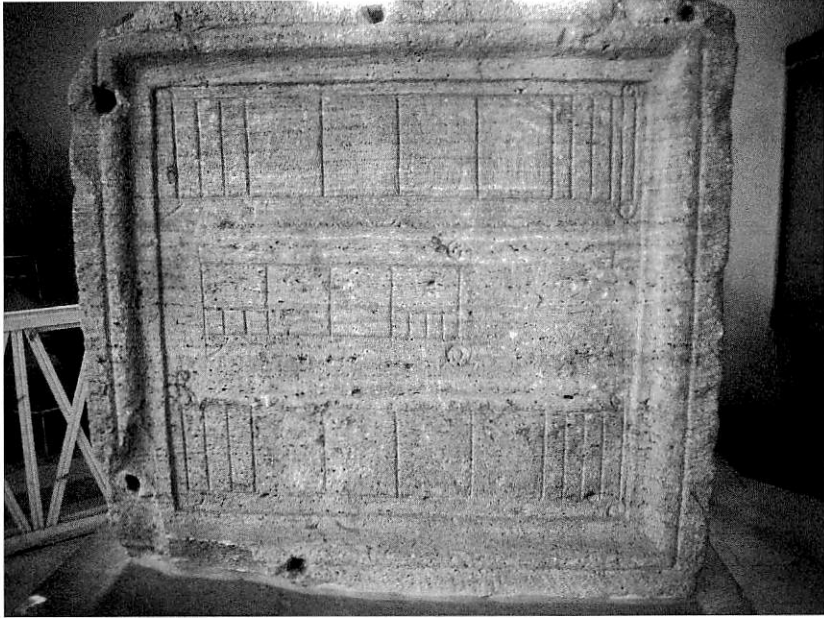


写真2 ローマ、フェニキア、エジプト尺（著者撮影）

そのモチーフや建築様式におけるアレクサンドリアの影響に言及している。このマウソレアはサブラタの第6区に位置し、紀元前2世紀に年代付けられている。そこにはエジプトのベス神が描かれ、建設された当初は町の外側に位置していた<sup>(30)</sup>。ディ・ヴィータはサブラタにヘレニズム文化が流入していたことを明らかにしたのである。

さらに、紀元前1世紀から紀元後1世紀初頭にかけて造られたとされるサブラタの貨幣には、セラピス神とメルカルト神が描かれていたことから、アレクサンドリアとのつながりを見て取れる<sup>(31)</sup>。セラピス神はプトレマイオス朝がエジプトの人心を掌握するために作り出した神で、後に様々な神と融合していった。またレプキスにおいても、紀元後2世紀にセラピス神を祀る神殿が建設された。図4はレプキスで見つかった彫像で、紀元前2世紀から紀元前1世紀に年代付けられている。この彫像の作製技法はギリシア古典期の技法を示しているが、左腕を曲げているデザインはエジプトからの影響を示している。他方、彫像が着ている服はギリシアのものではなく、オリエント風のものであるとディ・ヴィータは分析する<sup>(32)</sup>。

また、サブラタの都市の東端には、海へせり出すようにイ



図4 レプキスの彫像 (A. Di Vita, "Influence Grecque et Tradition Orientale dans l'Art Punique de Tripolitaine." *Mélanges de l'École Française de Rome, Antiquités EFR* 80, 1968, p. 67)



シス神殿が建立されていた(図5)。サブラタのイシス神殿は、図6のアレクサンドリアの都市プランと比べてみると、神殿の位置において非常に似ていることがわかる。イシス女神は、ヘレニズム時代に入り様々な要素を付与されて航海を司る女神となっていく。サブラタのイシス神殿はアレクサンドリアのイシス神殿と同様に、海から帰る人びとを迎える役割をした。このイシス神殿は、後64年から後70年の間にサブラタを襲った地震の後に再建されており、少なくとも、最初の地震の前までにイシス神殿が建立されていたことがわかる<sup>(33)</sup>。エジプト文化の表象は、都市アレクサンドリアを經由して西地中海地域に広がっていったことが知られている<sup>(34)</sup>が、以上述べたこれらの証拠は、紀元前からローマ帝国期になってもなお、変わらずトリポリタニアと

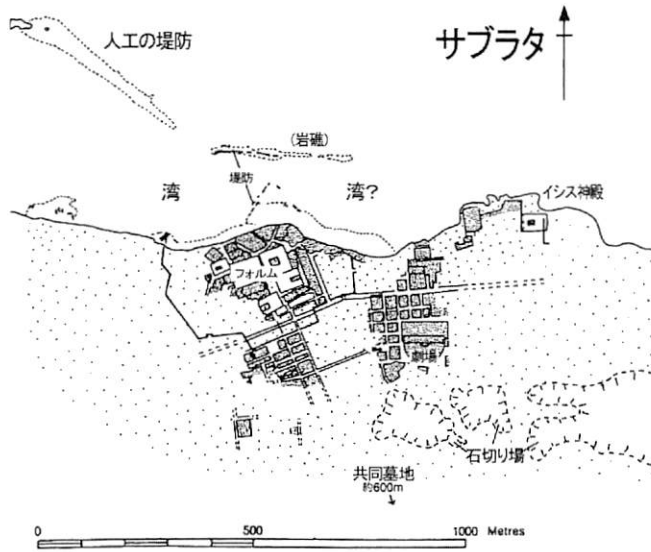


図5 サブラタのイシス神殿 (D. J. Mattingly, *Tripolitania*, Michigan, 1994, p. 125. より作成)

### クレオパトラ時代のアレクサンドリア



図6 アレクサンドリアのイシス神殿 (浅香正『クレオパトラとその時代 ローマ共和政の崩壊』創元社, 1974年, 18頁より作成)

エジプトとの関係が継続していたことを示唆している。

レプキスとサブラタの間に位置する都市オエアにおいては、エジプトだけでなく東地中海諸地域との関係を示す資料が他にも出土している。プライスは、トリポリ博物館所蔵のオエア出土のガラス容器を分析し、後1世紀に年代付けられるガラス容器がイタリアだけではなくキュプロスをはじめとした東地中海地域からも輸入されていたことを明らかにした。また直接輸入されていたわけではないにしても、オエアから出土した前1世紀に年代づけられるアンフォリスコスと同型のものが、エーゲ海北部サモトラケ島のアウグストゥスもしくはティベリウス治世に年代付けられる王の墓域から出土している。さらにオエアで出土した飲物のために使用されるガラス容器も、キュプロスやクノッソスから見つかったものとも非常に類似している。このことからプライスは、東地中海地域を活動範囲とする、ある特定のガラス職人がいた可能性を提示している<sup>(35)</sup>。このプライスの見解も、長期に渡ってトリポリタニアと東地中海地域との関係が継続していたことを明らかにしている。

以上のように、従来は主に西地中海地域の中で語られてきたレプキスだったが、エジプトや東地中海地域との関係があったことは明らかである。次に後1/2年に建設された劇場を分析する。劇場は前述のように「ローマ」を象徴するもので、「都市の顔つきを変える」ものとして認識されてきた。東地中海との関係が継続されていたことを踏まえた上で、第三章では劇場を考察する。

### 第三章「劇場に見るレプキス」

1935年からジャッコモ・グイーディにより3年間継続された発掘調査が、レプキスの劇場研究における嚆矢となっている。この劇場は観客席を含めた直径の長さが88.50mで、属州アフリカで二番目の大きさを誇る。最も大きい劇場は後2世紀後半に建設されたサブラタの劇場である<sup>(36)</sup>。つまり建設された当初、レプキスの劇場が属州アフリカにおいて最大の劇場であったことがわかる。劇場を建設したのは市場と同様、アンノーバル・タパピウス・ルフスであった。

もともと、劇場はギリシア都市に存在していた。ギリシア都市では劇場の観客席を丘の中腹を利用して建設していたが、ローマ帝国下に造られた劇場は、土木建築技術の発展によって場所を選ぶことなく建設することが可能となったといわれる。つまり自然の地形を利用したギリシアの劇場と場所を選ばないローマの劇場は、「見た目」が大きく異なるのである。そしてレプキスの場合は、平地に劇場が造られており、典型的なローマ型の劇場であった。

ギリシア世界における演劇は宗教と密接に関係しており、特にディオニュソス神との関わりのうちに誕生したとされる<sup>(37)</sup>。それを裏付けるかのように、通常劇場は神域や神殿と隣接していた。そして劇場は市壁の外側に建設された。市壁の外側に建設されたという点においては、都市ローマも同様である。都市ローマの劇場は聖域であるマルスの野に建設された。しかし都市ローマの場合は、前55年にポンペイウスによって初めて劇場が建設された時、劇場は娯楽施設だと思われていた。そのため、ポンペイウスは劇場観客席の最上部にウェヌスを祀る神殿を付設し、

劇場を神殿と呼称したという<sup>(38)</sup>。

一方、レプキスにおいて劇場が建設された場所は、ヘレニズム期においてネクロポリスとして使用されていた場所だった。劇場の舞台の下は前6世紀から前2世紀まで使用された共同墓地だったのである<sup>(39)</sup>。そしてレプキスの劇場の観客席最上部にも、都市ローマのポンベウス劇場と同様に、神殿が付設されていた。

劇場内部の構造をみると、都市ローマにおいてアウグストゥスがつくったマルケルス劇場の下部構造を踏襲している<sup>(40)</sup>。しかしレプキスの劇場は、細部において差異が見られる。それは、大きなファサードを支えている巨大な付柱がヌミディア様式の墓の特徴を示している点である<sup>(41)</sup>。レプキスの劇場においてこのヌミディア様式の技術が使用されていた事実は、都市ローマのマルケルス劇場のようなアーチ型のファサードに不慣れであったことを示唆している。レプキスにおいて見られるような形のファサードは、共和政末期にガリア・ナルボネンシスなどで見られるものであった。属州アフリカにおいて、都市ローマのマルケルス劇場のような完全に洗練されたアーチ型のファサードをもつ劇場は、後2世紀になるまで出現することはなかった<sup>(42)</sup>。つまりレプキスにおいて「ローマ」の表象とされる劇場は、都市ローマの再現としてではなく、アフリカ土着のヌミディアや西地中海の要素から構成されていたのである。さらに、劇場は様々な要素により構成されている。

前述のように、この劇場の観客席最上部には神殿が付設されていて図7aはその神殿を示している。以下この神殿を劇場神殿と呼ぶこととする。この劇場神殿は碑文の内容から、後34/35年に献納されたことがわかっている<sup>(43)</sup>。しかしこの劇場神殿は碑文が献納された時に付設されたものではなく、劇場を建築した当初からあったことが祠に通じる階段の構造から確認できる<sup>(44)</sup>。ギリシア都市においては、劇場と神殿が組み合わせられて建築されることはなく、劇場に神殿が付設されたのは前述したポンベウス劇場が初めてであった。しかし「ローマ化」が顕著であったとされるローマ帝国西部においても、神殿が付設された劇場の例は多く見られるわけではない。ローマ帝国内において神殿が付設されている劇場で建築プランがはっきりしているのは、ポンベウス劇場や、前15年ガリア・ナルボネンシスのウィエンナに建てられた劇場である。さらにアフリカではヌミディア人が建設した都市トゥッガに紀元後2世紀に建てられた劇場にも見ることができる<sup>(45)</sup>。図7b, c, dにはそうした事例を示している。扇型の劇場観客席に飛び出すような形で付設されているのが、劇場神殿である。同じように神殿を付設した劇場であっても、レプキスと他の三つの劇場神殿を比較すると、その構造が異なっていることがわかる。レプキスの劇場の神殿には、6つの柱がセツラ cella という神像安置所の前に位置していて、その神像安置所の玄関の先にさらに二本の柱があった<sup>(46)</sup>。しかしbのポンベウス劇場には、レプキスにはない前室が存在していることがわかる。前室とはセツラの前に位置する部屋のことと、dのトゥッガの劇場にも存在している。一方、cのウィエンナの劇場には前室がない。同じ属州アフリカのトゥッガの劇場神殿とレプキスの劇場神殿の構造が異なるというこの事実は、レプキスにおいてローマと対置される文化である「土着のアフリカの要素」が一様ではないことを示している。

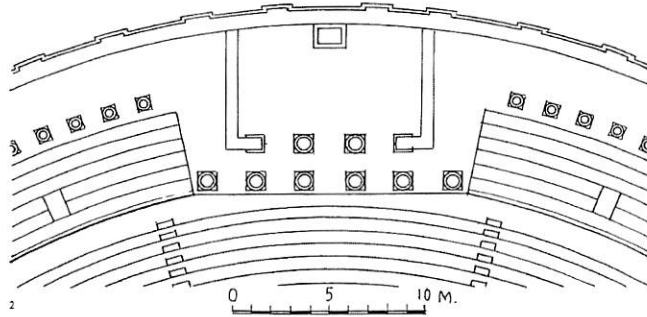


図7a レプキスの劇場神殿 (G. Caputo, *Il Teatro Augusto di Leptis Magna; Scavo e Restauro (1937-1951)*, Roma, 1987, tav. 152.)

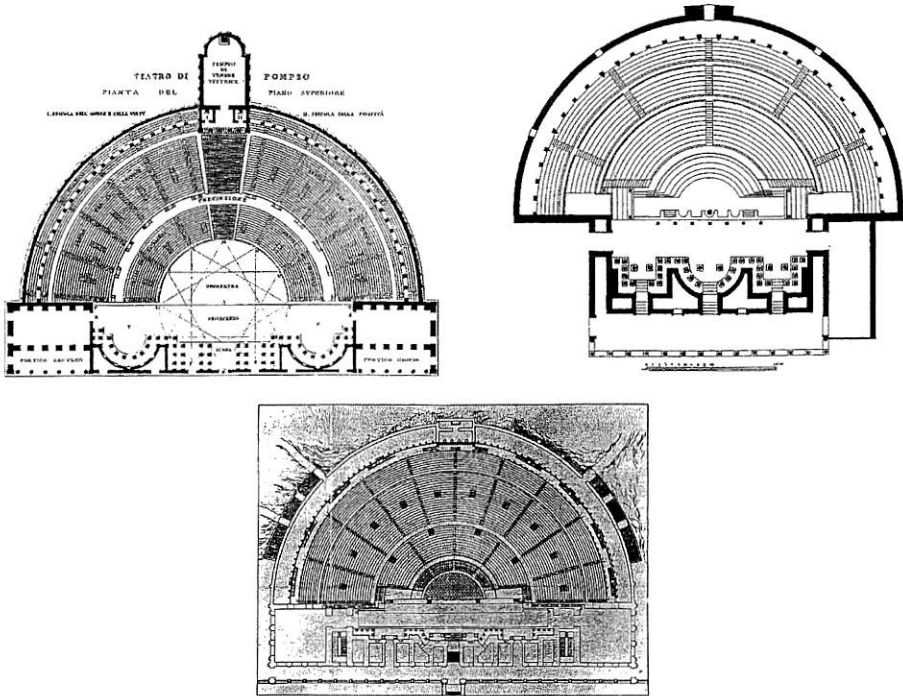


図7b ポンペイウス劇場, c ウィエンナの劇場, d トゥッガの劇場 (J. A. Hanson, *Roman Theater-Temples*, Princeton, 1959, illust. 16, 24, 32 より作成)

そして、レプキスの神殿には豊穡の女神ケレスが祀られていた<sup>(47)</sup>。劇場はもともとディオニユス神との関わりが深かったこともあり、劇場神殿に祀られる神がケレス女神である必要はなかった。例えば、ポンペイウス劇場に祀られた神はポンペイウス家の神ウェヌス神であり、ウィエンナに祀られていたのはアポロ神であった<sup>(48)</sup>。属州アフリカにおいて、ケレス女神はフェニキアのタニト女神と同一視されたと考えられている<sup>(49)</sup>。

図8aのレプキスの劇場神殿に祀られていたケレス女神の彫像は、カプートによると、テュケ女神のデザインとして表現されていた<sup>(50)</sup>。テュケ女神はローマではフォルトゥーナ女神と同一視されていた。つまり、レプキスではケレス女神はフォルトゥーナ女神の姿として祀られていた



図8a レプキスのケレス女神 (G. Caputo, *Il Teatro Augusto di Leptis Magna: Scavo e Restauro* (1937-1951), Roma, 1987, tav. 1)



図8b オスティアのフォルトゥーナ女神像, c ローマのケレス女神像 (Lexicon iconographicum mythologiae classicae, VIII, p. 91, p. 602 より作成)



ということになる。図8b, cにはオスティアのフォルトゥーナ女神像, ローマのケレス女神像を載せた。カプートは, レプキスのケレス女神像の左腕には長方形の空間があり, 通例フォルトゥーナ女神が持っているような豊穡の徴であるコルヌコピアを持っていたこと, さらに城壁のような王冠を被っていることからテュケ女神であろうと分析している。つまりレプキスのケレス女神は, 図8bのような姿として表されていたことになる。しかし属州アフリカにおいて, ケレス女神をテュケ女神すなわちフォルトゥーナ女神として表すという決まりはないようである。例えばカルタゴのケレス女神はフォルトゥーナ女神のデザインで表されてはいない<sup>(51)</sup>。劇場神殿の構造と女神のデザインの差異は, アフリカ内でも様々な様式が存在したことを示している。これらの事象は, さらに多くの資料の提示が必要ではあるが, 属州アフリカ内においても画一的に理解できないことを示唆する一例となる。

女神のデザインは属州アフリカ内で画一的ではなく, さらにこの彫像は, アテネに近いペンテリカス山産の大理石によって作られていることがわかっている。そして女神の乗る台座は, レプキス周辺で採れる明るい灰色の石灰岩であった。彫像の高さはこの台座を含めて3.10 mある巨大なものである。ワルダによると, レプキスでは外国から訪れた彫刻家が輸入した大理石で作業をするか, アッティカ地方やアレクサンドリアからすでに出来上がった彫像が輸入されたと考えられている<sup>(52)</sup>。そしてカプートによると, 髪の毛やローブの波形を表現する鋭い彫り込みは, ヘレニズム期の彫像を模倣した完成した技術を持った彫刻家によるものであり, 基本的には, 前4世紀のアテナイ人であるプラクシテレスの様式で表現されているという<sup>(53)</sup>。以上を勘案する

と、この彫像はアテナイから輸入された大理石で、ギリシア人の彫刻家の手によってレプキスで作られたと考えることができる。確かにシチリアなどのマグナ・グラエキアからの影響と見ることでもできるが、大理石がアテナイ産であることも考慮に入れると、この彫像も東地中海地域との関わりを示す要素として見ることができるだろう。

## お わ り に

レプキスは属州アフリカの中心地から遠かったために自治を保ち、経済的特性がその都市発展の要因となった、と考えられている。しかしローマによる直接の支配がなかったにも関わらずレプキスはなぜ都市発展を遂げたのであろうか。

第一章では、レプキスの通史を辿る中で、レプキスの「十分な自治」には強者の狭間にあるという政治的立場が含まれていたことを確認した。つまりレプキスが保有していた自治は「強者の狭間」という状況下においてであり、栗田が属州アフリカの「ローマ化」理解に対して指摘するように、レプキスの都市発展を理解する上でも政治・軍事的ローマの存在を軽視すべきではないのである。このようにローマの存在を確認する一方で、レプキスの文化変容への研究がローマを中心とした西地中海地域という政治的枠組みにおいて考察されてきたことを問題とした。このような観点から、レプキスと東地中海の文化的つながりについて二、三章で考察した。

第二章ではレプキスの市場におけるエジプト人の往来を示す痕跡をはじめ、サブラタでは紀元前二世紀からアレクサンドリアの影響を見て取ることができ、オエアから出土したガラス器には東地中海との交易があったことが示唆された。東地中海世界との関係を確認した一方で、第三章では「ローマ」を象徴すると考えられている劇場に、都市ローマやイタリアなどをはじめとした西地中海諸地域の要素以外のものが存在することを明らかにした。従来この西地中海地域以外の要素は、土着のアフリカの要素として一括りにされてきた。しかし劇場やそこに祀られていた女神のデザインから、属州アフリカの中でも異なる要素が存在することを明示した。つまりトリポリタニアと東地中海地域とのつながりを示すことで、トリポリタニアの文化変容についてローマを中心とした西地中海地域という政治的枠組みで捉えることに疑問を提示したのである。

ローマを中心とする西地中海地域という視点で文化変容を語ると、その都市とローマとの関係のみに拘泥してしまう。レプキスの「ローマ化」について、都市発展と文化変容を全く同一のレベルで語ることはできない。そして、その二つの異なる次元のものを架橋するのが「文化的土壌」という視点だといえる。

レプキスの都市発展の要因として、マッティンリーはオリーブ油に注目し、それを経済的特性として挙げた。確かにその見解は、レプキスが都市発展をする際の大きな要因は何だったのかという問いに答えてはいる。しかし、レプキスはなぜ都市発展を遂げたのか、という根本的な疑問は伏されたままである。レプキスの地理的環境を考慮すると、西地中海地域と東地中海地域の境界に位置するというトリポリタニアの「文化的土壌」が、ローマ支配の影響が少なかったにも関わらず、かえって市場や劇場のような「都市の顔つきを変える」ものを求めさせた、とは考えら

れないだろうか。

注

- (1) D. J. Mattingly, *Tripolitania*, Michigan, 1994, p. 50.
- (2) R. Y. T. Lee, *Romanization in Palestine: a Study of Urban Development from Herod the Great to AD 70*, BAR International Series 1180, Oxford, 2003, pp. 6–10.; 南川高志『海のかなたのローマ帝国 古代ローマとブリテン島』岩波書店, 2003年, 39–43頁を参照。
- (3) 従来ローマ帝国史研究において, 土着社会がローマ的な文化様式を身につける現象のことをローマ化 romanization と呼んだ。しかし1990年代以降, ローマ化という研究史概念はローマを文明の中心に据えた帝国・植民地主義的言説であるとして退けられる。代わりに, 土着社会の存在を強調するポスト帝国・植民地主義的視点のもと, 土着社会のエリートが彼らのステイタス・シンボルとして「ローマ」を獲得した, 自己ローマ化 self-romanization という理論が提示された。しかし主に文字史料を用いず土器や図像を研究対象とする考古学者たちは, ローマ化・自己ローマ化理論のどちらもローマを中心に考えていることに変わりはないとして批判する。彼らは文化を相対化し, 土着社会の人の視点の視点を強調することによって, 土着社会の変化の一過程としてのみその変化を位置づけたのである。従って現在では考古学者を中心に, ローマ化や自己ローマ化という用語は避けられ, 文化変容 acculturation と呼ぶことが多くなっている。
- (4) 例えば S. Fontana, “Leptis Magna: The Romanization of Major African City through Burial Evidence”, in S. Keay, and N. Terrenato eds., *Italy and The West: Compative Issues in Romanizaiton*, Oxford, 2001, pp. 161–172.; R. Macmullen, *Romanizaiton in The Time of Augustus*, New Haven and London, 2000, p. 30. など
- (5) 本論では詳しく触れないが, 属州アフリカの「ローマ化」議論は歴史認識の問題と不可分である。例えば, 栗田伸子「ローマ支配の拡大と北アフリカ」, 歴史学研究会編『古代地中海世界の統一と変容』青木書店, 2000年, 151–158頁を参照。
- (6) Sallustius, *Bellum Iugurthinum*, 19. 3.
- (7) Mattingly, *op. cit.*, pp. 51–52.
- (8) Livius 34, 61, 3–4.; Mattingly, *op. cit.*, p. 51. リウイウスは「貢納した」としか記していないが, マッティンリーはオリーブ油であろうと推測している。
- (9) Mattingly, *op. cit.*, pp. 50–51.
- (10) *ibid.*, pp. 50–51.
- (11) *ibid.*, pp. 51–52.
- (12) *ibid.*, pp. 51–52.
- (13) *De Bello Africo*, 97.
- (14) Mattingly, *op. cit.*, pp. 51–52.
- (15) Mattingly, *op. cit.*, pp. 138–144.; W. Ball, *Rome In the East*, London and New York, 2000, p. 421.
- (16) C. R. Whitaker, Roman Africa: Augustus to Vespasian, *The Cambridge Ancient History 2nd ed. vol. X*, Cambridge, 1996, pp. 586–611.
- (17) 栗田伸子「ローマ支配の拡大と北アフリカ」, 歴史学研究会編『古代地中海世界の統一と変容』青木書店, 2000年, 148–176頁。
- (18) Sallustius, *Bellum Iugurthinum*, 77. 1.
- (19) *De Bello Africo*, 97.
- (20) *Historia Augusta Severus*, 15. 7.
- (21) S. Fontana, “Leptis Magna: The Romanization of Major African City through Burial Evidence”, in S. Keay, and N. Terrenato eds., *Italy and The West: Compative Issues in Romanizaiton*, Oxford, 2001, pp. 161–172.

- (22) J. B. Ward-Perkins, "Pre-Roman Elements in the Architecture of Roman Tripolitania" in F. F. Gadallah ed. *Libya in History: Proceeding of a Conference Held at the Faculty of Arts, University of Libya*, Benghazi, 1971, (以下 Ward-Perkins, "Pre-Roman Elements" と略す) p. 103.
- (23) J. B. Ward-Perkins, "From Republic to Empire: Reflections on the Early Provincial Architecture of the Roman West", *Journal of Roman Studies* 60, 1970, (以下 Ward-Perkins, "From Republic to Empire" と略す) pp. 14-15.
- (24) Mattingly, *op. cit.*, p. 118.
- (25) P. Zanker, "The City as symbol: Rome and the creation of an urban image," in E. Frenness ed., *Romanization and the City: Creation, Transformation, and failures*, Portsmouth, 2000, p. 37.
- (26) A. Wallace-Hadrill, "Rome's Cultural Revolution", *Journal of Roman Studies*, 79, 1989, pp. 157-164.
- (27) Ball, *op. cit.*, pp. 421-423.
- (28) Macmullen, *op. cit.*, pp. 36-37.
- (29) Ward-Perkins, "From Republic to Empire", pp. 15-19.
- (30) A. Di Vita, "Influence Grecque et Tradition Orientale dans l'Art Punique de Tripolitaine." *Mélanges de l'École Française de Rome, Antiquités* 80, 1968, pp. 16-29.; ベス神に関しては, 大城道則『古代エジプト文化の形成と拡散』ミネルヴァ書房, 2003年, 149-170頁を参照。
- (31) Mattingly, *op. cit.*, p. 126.
- (32) Di Vita, *op. cit.*, pp. 48-50.
- (33) Mattingly, *op. cit.*, p. 127.
- (34) 大戸千之「ヘレニズム時代における文化の伝播と受容—地中海東部諸地域におけるエジプト神信仰について」, 師尾晶子, 森谷公俊編『古代地中海世界の統一と変容』青木書店, 89-116頁。; 大城, 前掲書, 187-210頁を参照。
- (35) J. Price, "Early Roman Vessel Glass from Burials in Tripolitania: A Study of Finds from Forte Della Vite and Other Sites Now in the Collections of the National Museum of Antiquities in Tripoli", D. J. Buck and D. J. Mattingly eds., *Town and Country in Roman Tripolitania*, Oxford, 1985, pp. 67-106.
- (36) F. B. Sear, The Theatre at Leptis Magna and the Development of Roman Theatre Design, *Journal of Roman Archaeology*, 3, 1990, p. 376.
- (37) 新関良三『ギリシャ演劇史概説』東京堂, 1957年。
- (38) Tertullian, *De Spectaculis*, 10.
- (39) G. Caputo, *Il Teatro Augusteo di Leptis Magna; Scavo e Restauro (1937-1951)*, Roma, 1987, p. 18.
- (40) Sear, *op. cit.*, p. 377.
- (41) Caputo, *op. cit.*, p. 17.
- (42) Sear, *op. cit.*, p. 377.
- (43) J. Reynolds and J. B. Ward-Perkins (eds.), *Inscriptions of Roman Tripolitania*, London, 1952, (以下 IRT と略す) no. 269.
- (44) Caputo, *op. cit.*, pp. 61-64.
- (45) J. A. Hanson, *Roman Theater-Temples*, Princeton, 1959, pp. 61-68.
- (46) Hanson, *op. cit.*, p. 60.
- (47) IRT, no. 269.
- (48) Hanson, *op. cit.*, pp. 60-77.
- (49) Hanson, *op. cit.*, p. 60.
- (50) Caputo, *op. cit.*, pp. 64-66.
- (51) B. S. Spaeth, "The Goddess Ceres in the Ara Pacis Augustae and the Carthage Relief", *American Journal of Archaeology*, 98, 1994, pp. 65-100.
- (52) H. M. Walda, "Provincial Art in Roman Tripolitania", in D. J. Buck and D. J. Mattingly eds., *Town and*



*Country in Roman Tripolitania*, Oxford, 1985, pp. 51–52.

(53) Caputo, *op. cit.*, pp. 64–65.

(関西大学大学院文学研究科・博士課程後期課程)